北京大学日语学科
成立60周年国际研讨会论文集

日本语言文化研究

第八辑

北京大学日本语言文化系
北京大学日本文化研究所 编

學苑出版社

北京大学日语学科成立60周年国际研讨会论文集

日本语言文化研究

第八辑

北京大学日本语言文化系
北京大学日本文化研究所 编

學苑出版社

图书在版编目（CIP）数据

日本语言文化研究：北京大学日语学科成立60周年国际研讨会论文集．第八辑／北京大学日本语言文化系，北京大学日本文化研究所编．—北京：学苑出版社，2008.5

ISBN 978-7-5077-3095-1

I．日…II．①北…②北…III．日语-语言学-文集IV．H36-53

中国版本图书馆CIP数据核字（2008）第090514号

责任编辑： 韩继忠
封面设计： 艾博堂文化
出版发行： 学苑出版社
社　　址： 北京市丰台区南方庄2号院1号楼
邮政编码： 100079
网　　址： www.book001.com
电子信箱： xueyuan@public.bta.net.cn
销售电话： 010-67675512、67602949、67678944
经　　销： 全国新华书店
印 刷 厂： 固安生强印制有限公司
开本尺寸： 787 x 1092　1/16
印　　张： 35
字　　数： 820千字
版　　次： 2008年5月北京第1版
印　　次： 2008年5月北京第1版
印　　数： 0001—1000册
定　　价： 80.00元

《日本语言文化研究》编辑委员会

顾　问：孙宗光　徐昌华　潘金生　顾海根
编　委：刘金才　于荣胜　彭广陆　赵华敏
　　李　强　滕　军

本辑执行主编：李奇楠

序

北京大学的日语教学历史悠久，似可追溯到上个世纪之初。1902年，同文馆并入京师大学堂（北京大学的前身），次年改称译学馆，并正式招生，设有英、俄、法、德、日五国语言文字专科，学制五年，如果将此视为北京大学日语专业之滥觞，则北大日语专业当有百年以上的历史。其后一个历史时期的沿革尚有待于进一步考证。1946年北京大学组建东方语言文学系；1949年日语专业开始招收第一届本科生，这可以说是我国高等院校中最早的日语语言文学专业。60年代日语专业还招收过研究生。1981年经国务院学位委员会批准，北京大学日语专业成为国内第一批日语语言文学专业硕士点之一，1985年又成为我国第一个日语语言文学专业博士点。1987年成立北京大学日本文化研究所，并根据学科发展的需要，增设了日本文化研究方向，专业名称也改为日本语言文化专业，成为日本语言、日本文学、日本文化三个学科方向齐全，具有学士、硕士、博士三级学位授予权的专业。1999年6月，北京大学外国语学院成立，日本语言文化专业更名为“日本语言文化系”，成为外国语学院下属的8个系之一。

北大日语学科自成立以来，秉承北京大学综合大学的人文传统，坚持教学和科研并重的办学方针，在学科建设、人才培养、学术交流等方面取得了令人瞩目的成绩。

回顾北京大学日语学科60年来走过的风雨历程，不禁令人怀念起以徐祖正、魏敷训、陈信德、刘振瀛、孙宗光诸位先生为代表的老一辈专家学者，他们几十年如一日，默默耕耘，为北大的日语学科乃至中国的日语教学研究事业做出了开创性的贡献，受到后人的景仰和尊敬。

徐祖正是北大日语专业、也是我国日语界的第一位教授。陈信德是我国最早的著名日语研究学者，其代表作《现代日语实用语法》是解放后我国出版的第一部系统的日语语法书，在当时及以后的很长一段时期内对我国的日语语法研究和教学产生了深远的影响。刘振瀛是建国以后我国日本文学研究的代表性学者，曾翻译《我是猫》《小说神髓》等著名文学文论作品，并与其他教师合译西乡信冈的《日本文学史》，在日本文学的译介、研究以及普及方面做出了开拓性的贡献。刘振瀛是我国第一个日语语言文学专业的博士生导师，曾任中国日语教学研究会第一任会长，还是国务院学位委员会学科评议组成员中第一个日语语言文学专业的委员。此外，徐昌华培养出了我国第一位日语语言文学博士。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

曾经在北大日语学科任教的日本专家为北大日语人才的培养倾注了大量的心血，尤其是冈崎兼吉、铃木重岁、儿玉绫子等老专家为北大的日语教学贡献了大半生，其中冈崎兼吉先生曾荣获国务院颁发的友谊奖。儿玉绫子女士将其全部积蓄捐献给了北大，设立了“铃木重岁、儿玉绫子奖教金”，以奖励日语系的教师和学生。

进入新时期以来，北大日语专业在本科生的教学体系中加大了日本社会文化课程的力度，并且在研究生培养方面增设了日本文化研究方向，改变了传统的以语言技能基本训练和翻译人才培养为主的课程设置和教学模式，初步实现了向培养适应社会发展各方面所需要的高素质人才方向的转变。

北京大学日语专业自创立起就一直十分重视教材的编写。由日语专业教师合编的公共日语课教材《日语》是国内解放以后最早出版的大学日语教材之一。1964年，陈信德主编了建国以后我国第一部专业日语教材《日语》，在60~70年代受到日语学习者的普遍欢迎。陈信德还编著过《科技日语自修读本》等教材。

改革开放以后，1980年由孙宗光主持编写的《基础日语》荣获1988年国家教委高校优秀教材一等奖。1994年，孙宗光、徐昌华、赵华敏与兄弟院校合作编写了全面贯彻1990年制定的《高等学校日语专业基础阶段教学大纲》、以功能意念为主线的《新编基础日语》。此外，以彭广陆为主编之一的《基础日语教程》被教育部列入了“九五”重点教材。

跨入新世纪以后，2003年由赵华敏、彭广陆、李奇楠合编的《高年级日语精读》获北京大学2004年教学成果一等奖，同时荣获2004年北京市教育教学成果（高等教育）二等奖。2004~2006年出版的《综合日语》是由彭广陆、守屋三千代为代表的中日两国日语教学专家合作编写的，该教材吸收了日本对外日语教学的研究成果，采用了新的语法体系，所选素材贴近实际生活，收到了良好的教学效果，被评为北京高等教育精品教材。

刘振瀛、卞铁坚、潘金生合编了《日本近现代文学阅读与鉴赏——附日本近现代文学概述》。于荣胜编写的《日本现代文学选读》的修订版被纳入“十五”国家规划教材。潘金生等所编《日本古典文学读本》，填补了国内这方面教材的空白。

截止到2006年9月，北大日语专业已经为国家培养了一批又一批的毕业生，其中包括本科生920名，硕士93名，博士8名。他们曾经或现在活跃在不同的工作岗位上，发挥各自的聪明才智，为祖国做出应有的贡献。

北京大学日语专业现有本科生72名，硕士研究生25名，博士研究生24名。日语专业每年还为全校大约300名外系学生开设公共日语课程。从2002年起，还开设了日语辅修专业，以满足越来越多的学生学习日语的需要。为更好地履行服务社会的职责，从2005年10月起，北大日语专业成为北京市日语自学考试命题学校，目前正在抓紧编写配套教材，以满足日益增长的社会需求。

北大日语专业一直坚持教学与科研并重的办学方针，特别是改革开放政策为专业的学科建设注入了生机和新的活力。

据截止到2006年9月的不完全统计，自20世纪80年代以来，日语专业的教师共主持或参加国家级科研项目11项，省部级科研项目15项；出版专著11部，合著12部，编著25部，译著43部，教材43部，工具书18部，公开发表学术论文452篇。日语专业教师的科研成果受到学界的好评，迄今为止共获得国家级科研奖5项，省部级科研奖8项。我系还先后主办了8次大型国际学术研讨会，在国内外产生了一定的影响。为反映日语专业教师的最新科研成果和整体实力，加强与国内外同行的交流，日本语言文化系和日本文化研究所不定期地出版《日本语言文化研究》（原称《日本语言文化论集》），现已出版7辑；另出版有3部国际研讨会论文集。

日本语言的研究一直是日语专业的基础和根本。改革开放以来，日语专业在传统的日语语法研究比较扎实的基础和前提下开始了汉日语言对比研究，特别是与日本东京都立大学的合作研究更是促进了汉日语言对比研究的深入和整体水平的提高，取得了一批有益的成果。从80年代后半期开始，日语专业紧跟国内外语言学研究前沿，不断开拓新的研究领域。1988年，日语专业组成了课题小组，在国内率先开始了日语话语语言学的研究。1995年，徐昌华开设了日语语用学课程，1998年又开设了日语认知语言学课程。现在，北大日语专业语言方向研究的领域主要包括：(1)日语语法研究，(2)日语认知语用学研究，(3)日语借词研究，(4)汉日对比研究，(5)日语教学法研究。

日本文学研究始终是北大日语专业的强项和特色之一。早年刘振瀛对日本文学史的研究，卞立强、张光佩对日本无产阶级文学的研究具有拓荒的性质。改革开放以后，日本文学研究取得了丰硕的成果，主要经历了从开始译介日本文学作品到研究方法理论的系统化，并且不断深入，并最终实现研究对象的专题化这三个阶段。迄今为止，日本文学的研究成果概括起来主要有以下5个方面：(1)日本文学的翻译，(2)日本文学史与思潮流派研究，(3)日本文学作家与作品研究，(4)日本文学传统理念、美意识的研究，(5)中日文学的比较研究。

日本文化研究虽然起步较晚，但通过不懈的努力已逐步建立起了一支具有交叉学科知识和学术训练有素的教学科研队伍。研究日本文化由原来寓于语言和文学中的散点式研究模式转向了专题式研究以及融合文史哲等人文学科的综合性研究，特别是在：(1)日本思想和精神文化的性质和特征研究，(2)日本宗教文化研究，(3)日本民俗艺术文化研究，(4)日本国民性研究，(5)日本传统文化与现代的联系研究，(6)中日比较文化研究等方面，取得了很多创新性成果，受到学术界的好评和瞩目。

为了便于对外交流，1987年北大日语专业成立了日本文化研究所，孙宗光任第一任所长，并于当年成功地举办了较有影响的第一届“中日比较文化国际研讨会”。北京大学日语系成为中国国内较早成立日本文化研究机构的日语专业之一。

改革开放以来，日语专业获得了良好的发展机遇，率先开展国际学术交流活动。1978年，成功举办了日语教育讲习会，邀请阪田雪子等日本著名日语教育学家来我校讲学。1979年，日本著名语言学家金田一春彦应邀来北大日语专业讲学。1980年，北大日语专业由孙宗光牵头，与以奥津敬一郎为代表的日本东京都立大学国语教研室签订了关于合作进行汉日语言对比研究的三年计划，并顺利实施了这一计划。

北大日语专业一直与日本多所著名大学及学术机构保持着友好合作和交流关系。改革开放以来，日语专业先后接待了来自日本各大学及其他学术机构的近40多名专家学者来校访问讲学，如金田一春彦、藤原与一、石田一良、加藤周一、阪田雪子、奥津敬一郎、奥田靖雄、渡边实、久野暲、佐治圭三、宫岛达夫、野林正路、池上嘉彦、远藤织枝、野村雅昭、村木新次郎、工藤真由美、安丸良夫、熊仓功夫、高桥春雄、曾根博义、岛村辉、堀江拓充、末木文美士等著名学者都曾前来讲学或讲演。

北大现在与日本早稻田大学、庆应义塾大学、法政大学、日本大学、关西大学、创价大学等多所日本著名大学建立了校际交流关系，日语专业和这些日本的大学常年进行教师间的学术交流。同时，我系还与日本文教大学、同志社女子大学、一桥大学等建立了专项交流关系。

2005年，在日本“卡西欧（上海）贸易有限公司”的赞助下成立了“北京大学日本学研究卡西欧基金会”。根据基金会规定，设立北京大学日本学研究卡西欧学术奖（教师）和北京大学卡西欧奖学金（学生），每年评选一次。

如果从1946年东方语言文学系成立算起，至2006年，北京大学日语专业已历经整整60年的光荣岁月。按照中国的传统，60年是一个甲子，它是一个周期的结束，又是一个新的周期的开始。如果把一个专业的成长比作一个人的成长，回顾过去的60年，日语专业确实取得了一些成绩，但这绝不意味着我们可以骄傲，可以停步不前。相反，在处于全球化时代、各方面竞争日益激烈的今天，我们日本语言文化系更需要保持谦虚谨慎、戒骄戒躁的作风，发扬北京大学人文学科的优势，整合各种资源，为把中国的日语教学和研究推向更高水平做出应有的贡献。

在此，向多年来一直支持、帮助北京大学日语学科发展、成长的各位领导、国际友人、教育界、学术界的同仁以及其他一切朋友表示最衷心的感谢。

本论文集收录的是在纪念北京大学日语学科成立60周年研讨会上宣读、并经作者修改过的论文，共62篇。本论文集在编辑过程中得到日语系部分师生的支持与协助，谨致谢意。此论文集的出版，得到了学苑出版社孟白社长的大力支持，在此深表谢意。

北京大学日语系

2008年5月

目　录

基调报告

日本語話者における＜好まれる言い回し＞としての＜主観的把握＞
…… 池上嘉彦/1
ヨーロッパにおける日本語研究 …… Eschbach-Szabo，Viktoria/7

大会演讲

認識的モダリティーと情報構造 …… 工藤眞由美/13
「矢先」と「手前」ー「もの・空間」から「つなぎ」へー …… 村木新次郎/21
中国近、現代小説における「家」について—「孝」という観念を中心に…… 于栄勝/29
《新历史教科书》中的对外意识 …… 张龙妹/35

研究发表(姓名五十音序)

日本語の「してしまう」と韓国語の「hay polita」の対照研究
　ー翻訳資料と自然発話を対象としてー …… 李美淑/44
東アジアにおける日本語教育に関する一考察
　ー中国人大学生の日本語学習動機と対日観調査からー …… 磐村文乃/54
从「入れる」和“放”的对比看受事位移与致使义 …… 于　康/62
『神様』から見た川上弘美の創作特質 …… 王赫男/73
日本と西欧の近代文芸思潮
　ー自然主義の場合ー …… 尾久幸子/81
变幻的重奏——试论《从此以后》中的代助与“过去” …… 解　璞/91
日中同形語のコロケーションの差異について …… 河村静江/100
日中両言語における連体修飾句の順序性についての対照研究
　ー形容詞と名詞を中心にー …… 金　花/110
渡辺崋山における西洋認識 …… 邢永凤/118
松尾芭蕉と老荘思想 …… 黄華珍/128
大学日语四级考试试卷及其题目分析——以 2004 年试卷为例 …… 侯仁锋/137
从养老令的亲属称谓看古代日本礼和法的兼收并蓄 …… 胡　洁/145
共同注意と日本語教育——発話末のノを中心に …… 近藤　安月子/154
異文化コミュニケーションに現れる笑いの
　モダリティ調節機能について …… 笹川洋子/163

知識修正の「た」と権利の問題…… 定延利之/173
菅原道真の漢詩における白話的表現…… 周以量/182
日本語と中国語の情意形容詞に関する一考察
－二重主語構文の考察を通して－…… 朱鵬霄/193
逆接的補足接続詞の機能－逆接型接続詞との対照を通して－…… 徐園園/202
認知モードから見た日中対照－「主客合一」を中心に－…… 徐昌華・李奇楠/211
『平家物語』における清盛の悪行－覚一本を中心に－…… 徐　萍/220
中国の日本語教科書における「人間関係」の提示に対する意識の変遷
…… 秦　衍/229
諺から日本人の「恩」意識に関する一考察…… 秦　嵐/239
言語類型論から見る日中両言語の語順…… 盛文忠/248
中日関係の見方――戦後処理問題を中心に――…… 銭昕怡/257
U－Learning Contents の開発研究
－日本語の「基礎文字(ひらがな)」を中心に－…… 薛根洙/264
視覚動詞の内容節における動詞の形と意味について
－「シタ」形と「テイル」形を中心に－…… 孫敦夫/275
介詞“在”とそれに対応する空間名詞の格について…… 高橋　弥守彦/283
話し手の情報構造から捉えた「だろう」と“吧”…… 張　興/291
大学日语二外教学中学生流失的反思…… 张丽颖/303
母国語干渉の実証と検討
――日本語教科書の実例を中心に…… 趙平　浦田千晶/310
過去テンスについての類型論的な研究
－韓国語と首里方言を中心に－…… 鄭相哲/318
日本語の前置き表現について－対人配慮型を中心に－…… 陳臻渝/329
柏木の「おほけなき心」、密通、そして破滅
－物語文学史への一視角－…… 丁　莉/339
“一具跳动的白骨”
――论日本狂言艺术的特性…… 滕　军/348
日本教科书制度研究…… 唐　磊/353
異文化コミュニケーションにおける摩擦の要因
―討論場面にみる日本語母語話者のコミュニケーション …… 徳井厚子/361
「まじっ」の用法について …… 友定　賢治/369
間投助詞の「と」の機能…… 中川秀太/378
複合辞「にしてみれば」について…… 馬小兵/387
テクストタイプと文法的意味・機能
－「あまり」「あんまり」を中心に－…… 朴秀娟/394
日本語反事実的条件文の主節タ形について…… 橋本修/404
汉日语指示词中所反映出来的空间认知模式差异…… 潘　钧/412

论《中日交流标准日本语》中的语法系统…… 彭广陆/418
上代日本文学における吉野行幸歌の文学史…… 村田右富実/428
洋語名詞の形容詞化…… 森下 訓子/437
日常会話における不満表明の配慮表現…… 山岡政紀・牧原功・小野正樹/448
日本語の重言をめぐって
—その使用実態調査の結果に基づいて…… 俞晓明/457
中日両言語における名詞と動詞の材料的なくみあわせ…… 楊 華/466
『雪国』の視点研究…… 李国棟/476
正法眼藏の文体史的一考察
—「動詞＋動量補語」の語法の受容を例として—…… 李長波/485
「まで」と「さえ」の意味用法の異同分析…… 刘振泉/497
江戸時代庶民の伊勢信仰——その思想面の特質を中心に…… 劉琳琳/506
現代小説における引用表現の考察…… 廖慧梅 趙 剛/514
語彙的受身表現と文法的受身表現の意味特徴の分析…… 凌 蓉/525
学習者はどのように主体的な授業参加をしているか
—自発的発話に注目して—…… 冷麗敏/533
日本人学生のコミュニケーションの捉え方 …… 盧 濤/542

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

日本語話者における＜好まれる言い回し＞としての＜主観的把握＞

池　上　嘉　彦

要　　旨：

どの言語の話者も、同じ事態であってもそれをいくつかの違ったやり方で捉え、違ったやり方で表現するという能力を有していて、時と場合によってそれらを使い分けるという営みをしている。しかし、言語が違うと、ある事態についてのいくつかの可能な捉え方、違った表現の仕方のうち、どれが好んで使われるかということに関して、好みが異なるということも認められる。本稿では、そのような視点から、日本語話者好みの言い回しとして、認知言語学でいう＜主観的把握＞ということを取りあげ、そのような捉え方を反映する日本語表現のいくつかの特徴を具体例によって検討する。

キーワード：

認知言語学、主観的把握、主客合一、認知主体のゼロ化

1. 認知言語学でいう＜事態把握＞

＜事態把握＞は、認知言語学の＜ことば＞との取り組み方を特徴づける重要な概念の一つである。＜ことば＞と関わり合うという様相における＜ひと＞は、＜話者＞(少し固い言い方をすると、＜話す主体＞)として受けとめられるのが普通である。しかし、同じ＜事態＞と向き合っていても、＜ひと＞が違うとそれを違ったふうに言語化するということもあるし、同じ＜ひと＞でも、時によって違ったふうに言語化するということも決して珍しくない。このことから考えると、＜ひと＞が＜話す主体＞として＜ことば＞と関わり合う際には、＜話す＞という営みをすることに先立って、問題の＜事態＞についてそのどの部分をどのように表現するかを自らとの関わりにおいて考慮し、決定するという認知的な処理(つまり、＜こころ＞の働き)が介入しているはずである。具体的に言うと、＜ひと＞が＜話す主体＞としてある＜事態＞を＜ことば＞で表現しようとするとき、

(i)その＜事態＞に含まれるすべての＜もの＞/＜こと＞を表現しようとするわけではないし、また、そのようなことをするのは事実上、不可能である。実際には、問題の＜事態＞に含まれるある＜もの＞/＜こと＞は表現されるが、それ以外の＜もの＞/＜こと＞は表現されないままで終わる。

(ii)その<事態>の中で特に自分と関わりがある(つまり、自分にとって<意味>がある)と思われる<もの>/<こと>だけが選ばれ、自分との関わり方に従って表現される。

つまり、<ひと>は<話す主体>として振舞うに先立ち、問題の<事態>について何をどう表現するかを主体的に決めるという形で、<認知の主体>としての営みを行っている。この営みが<事態把握>と呼ばれる過程である。

同じ<事態>であっても、時と場合によって違ったふうに<事態把握>されることによって、違った表現の仕方で(従って、<意味>の違う表現として)言語化されうる。例えば、同じ<金星>というものが「明けの明星」とも「宵の明星」とも言語化されたり、同じ<太郎が次郎に本を与える>ということが、「太郎が次郎に本をあげる/やる」とも「次郎が太郎から本をもらう」とも言語化されたりするような場合である。このように、<ひと>は問題の<事態>をどのように捉えるかによって、その<事態>を違ったふうに意味づけすることができる。つまり、<意味>は<事態>そのものに内在するものではなく、<認知の主体>としての<ひと>が主体的に創出するものなのである。

2. 言語間で異なりうる<好まれる言い回し>

同じ<事態>であっても、それを違ったふうに捉え、違ったふうに表現することができるというのは、どの言語の話者も共通に有している能力である。しかし、同じ<事態>について、いくつかの違った捉え方、そしてそれに基づいてのいくつかの違った表現の仕方が可能であるという場合でも、その中のどの捉え方、どの表現の仕方が選ばれるかという点に関しては、言語が違うと話者の間で好みが異なるということがある。言い換えると、ある<事態>を表現するに際して、ある言語の話者によって好んで選ばれる言い回しは、別の言語の話者によって選ばれる言い回しとは傾向的に異なることがあるということである。例えば、<ある人が戦争で亡くなった>ということを言う場合、日本語話者は「彼は戦争で死んだ」というように自動詞構文で表現するのが普通であるが、英語話者は他動詞の受動態の構文で「彼ハ戦争デ殺サレタ」と言うのが普通である。同じ傾向的な違いは、心理的過程を表す表現では殆ど体系的に出てくる。例えば、<予期しないことを知らされて驚いた>というような場合、日本語話者は「(私は)知らせを聞いて驚きました」と言うであろうが、英語話者は「私ハ知ラセヲ聞イテ驚カサレマシタ」と言う。同じ対比は、「興奮する」と「興奮サセラレル」、「満足する」と「満足サセラレル」、など、広く見られる。同じ事態であっても、それを表現する<好まれる言い回し>が違うのである。

3. <主観的把握>と<客観的把握>

言語が異なると、それぞれの話者による<事態把握>の仕方に好みの差があるということは、言語のいろいろなレベル、さまざまな側面について認められることで

ある。認知言語学の枠組みが教えてくれるのは、そのような好みの差が話者の＜事態把握＞という営みのもっとも根本的なところでも既に起こりうるということで、本稿で特に指摘し、日本語教育、ないし、日本語学習に関わる人たちの注意を喚起しておきたいのも、まさにその点で、認知言語学の術語で＜主観的把握＞と＜客観的把握＞と呼ばれる対立に関わることである。

この二つの概念は、専門的な用語をできるだけ避けて言うと、大体次のように規定することができる：

＜主観的把握＞：話者が言語化しようとする事態の中に身を置き、当事者として体験的に事態把握をする場合。実際には問題の事態の中に身を置いていない場合であっても、話者はあたかもそこに臨場する当事者であるかのように、体験的に事態把握をする。

＜客観的把握＞：話者が言語化しようとする事態の外に身を置き、傍観者、ないし観察者として客観的に事態把握をする場合。実際には問題の事態の中に身を置いている場合であっても、話者はあたかもその事態の外に身を置いている傍観者、ないし観察者であるかのように、客観的に事態把握をする。

例えば、次に挙げる(1a)は日本語の原文、(1b)はその英語訳を日本語に訳したものである：

(1)a) 国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。(川端康成『雪国』)
b)汽車ハ長イトンネルヲ出テ雪国ヘ入ッテキタ。(エドワード・サイデンスティッカー英訳(の和訳))

日本語の原文が与える印象と英語訳から受ける印象の間にはずいぶん差が感じられるということで、よく話題になる箇所であるが、少し注意深く読めば分かる通り、原文が＜主観的把握＞(つまり、語り手は汽車に乗って移動している主人公に視点を合わせ、列車の移動に伴って列車の中から見える外の情景がどのように変化していくかを体験的に語るという構図)であるのに対して、英語訳では＜客観的把握＞(つまり、語り手は汽車の外に身を置いて――「キタ」という語が暗示しているように――トンネルを出て自分の方へ向かって進んでくる列車を眺めているという構図)に捉え直され、言語化されているというわけである。列車の中にいる主人公に同化した語り手にとっては列車そのものは視野に入らず、従って言語化されていないが、列車の外に身を置く語り手にとっては、列車は観察の対象になり、従って言語化されている。視る＜主体＞が視られる＜客体＞に間をとって対するという＜主客対立＞の構図になる＜客観的把握＞に対して、＜主観的把握＞では視る＜主体＞は視られる＜客体＞の中に身を置くという＜主客合一＞の構図をとる。視る＜主体＞にとっては自分自身は視られる＜客体＞ではないのであるから、＜主観的把握＞においては視る＜主体＞は言語化されないままに――あるいは、＜ゼロ＞とし

て表現されることに――なる。この点についての違いは、次の例でも認められる。

(2)a)まづ高舘に登れば北上川、南部より流るる大河なり。(芭蕉『奥の細道』)

b)私タチハマズ高舘ニ登ッタ。私タチハソコカラ北上川、南部ヨリ流レテクル大河ヲ見ルコトガデキタ。(ドナルド・キーン英訳(の和訳))

芭蕉の原文では見えた情景だけが言語化され、視る主体(芭蕉と供の曾良)は表現されていない。英語訳では見えた情景だけでなく、視る主体も視るという行為も言語化されている。

もちろん、日常的なレベルでも、同じような違いの例は事欠かない。

(3)a)星が二つ見えます。

b)〔英語の和訳〕私ハ二ツノ星ヲ見マス。

(4)a)風の音が聞こえる/風の音がする。

b)〔英語の和訳〕私ハ風ヲ聞ク。

日本語は見えること、聞こえることを述べていて、見たり聞いたりしている<私>は言語化されていない。英語では、見えること、聞こえることだけでなく、見ている<私>、聞いている<私>まで言語化している。

上の(1)から(4)までのどの例からも読みとれる通り、英語のような言語では話者自身が外から自分自身を視る、つまり、<自己の他者化>という構図で<客観的把握>を行い、それに基づいての言語化(つまり、自己の明示的な言語化)がごく自然になされる。日本語話者にとっては、<自己の他者化>とそれに基づく言語化は違和感があり、特に意識的にならない限り実践されないのが普通である。次のような対比を参照:

(5)〔道に迷って人に尋ねるとき〕

a) ここはどこですか。

b)〔英語の和訳〕私ハドコニイマスカ。

(6)〔電話で対話者を指名したら、たまたま本人だったという場合〕

a)「山田さんをお願いします。」「私です。」

b)〔英語の和訳〕「私ハ山田サントオ話シデキマスカ。」「コチラデ話シテイルノハ山田サンデス。」

(5a)の日本語話者の表現では、話者自身は観察の原点として話者自身の視野に入らず、従って<ゼロ>として言語化されている。一方、(5b)の英語話者の表現は、例えば「彼女ハドコニイマスカ」と他人の居場所を尋ねるのと同じ形式の表現で自分自身の居場所を聞いている――つまり、<自己の他者化>が起っているということである。日本語話者にとっては、<自己の他者化>は決して好まれる事態把握の仕方ではないので、英語の(5b)のような表現は異様にすら聞こえる。(6)のようなやり取りでは、答える側の話者は自分を客体化し、客体化した自分を言語化することに

なる。(そのような場合でも日本語話者は自分は自分として＜1 人称＞の形で言語化するが、英語話者は自分を完全に客体化し、＜3 人称＞として(従って、場合によっては、自分に敬称までつけた形で)言語化する。

話者が独り言の中で自分自身に語りかけるという場合にも、興味深い対比の認められるとのことである。日本語話者は(7a)のように相変わらず＜1 人称＞で自分に言及するのが普通のようであるが、英語話者は(7b)のように＜2 人称＞――つまり、自分を客体化し、客体化した自分を相手として語りかけるという構図――で事態把握をする方が普通のようである：

(7)a)私はもっと頑張らなくちゃ。
b)〔英訳の和訳〕オ前ハモット頑張ラナクチャ。

英語話者が容易に自分自身をも客体化し、＜客観的把握＞の構図で事態把握をする傾向があるのとちょうど対照的に、日本語話者は＜自己投入＞とでも言うべき認知的操作――つまり、自分自身が臨場しているのではない事態の中に自分自身を心理的に投入して、あたかもその事態を体験しているかのごとく＜主観的把握＞の構図で事態把握をするという傾向――が顕著であるように思える。例えば、平均的な日本語話者が俳句とどのように付き合うかを考えてみるとよい。

(8)古池や蛙とびこむ水の音

名句としてよく知られたこの芭蕉の句は、一見＜客観的把握＞に基づく単なる情景描写と受け取れないこともない。もしそれだけのことであったら、「それがどうしたの? どうしてそれが名句なの?」という反応だけで終わってしまってもおかしくない。この句が評価されるためには、＜主観的把握＞に基づく句として受けとめられなくてはならないのである。つまり、単なる中立的な情景描写ではなく、他ならぬ芭蕉という人物によって見られた情景(ただし、＜視る主体＞としての芭蕉は＜ゼロ化＞され、言語化されていない)ということである。芭蕉は、自分がこのように言語化した情景から何らかの強い印象を受け、何らかの深い思いを抱いたはずである。それは何であろうか。もし読者としての自分が同じその場に居て同じその情景を体験したとしたら、自分はどういう印象を受け、どういう想いを抱いたであろうか。どうであろうか... ――読者は多分このようにして、最初短い俳句から誘発させられた想いを、殆ど限りなく拡げていく。話者はこうして、まず、芭蕉の体験した情景に自己投入し、究極的には作者であり、当事者である芭蕉と＜主客合一＞の状態に至るわけである。

読者としての日本語話者には、時空の隔たりを越えて容易に＜自己投入＞をする傾向が強いように思える。読者としてではなく、自らが話者として振舞う場合も、時空の隔たりを越えての＜自己投入＞がしばしば起る。その一つの言語的な示唆として、日本語話者が過去の出来事について語る折に、しばしば非過去形の用言が混入する――しかも、西欧で言う＜歴史的現在＞の使用を遙かに越えるような頻度

で混入する——ということがある。例えば、次の(9)を参照。英訳される場合は、すべての文の時制が過去形で統一されるのが普通である：

(9)アリたち、おそるおそるなめ、いい気持となり、酒の味を覚える。酒と歌とくれば踊りだって自然と身につく。どう較べてみても、勤労よりこのほうがはるかに面白い。この冬ごもりの期間中に、このアリ一族の伝統精神は完全に崩壊した。(星新一『未来イソップ』)

4. おわりに

以上、日本語話者好みの事態把握の型として＜主観的把握＞の具体例を言語を媒体とする表現について見て来たが、実は同じ傾向が絵画を媒体とする表現の営みにおいても、少なくとも伝統的な手法に関して認められるという事実は大変興味深い。例えば、京洛絵図とか合戦絵図と呼ばれるものを見れば、すぐ気がつく通り、近くの家と遠くの家、近くの味方の軍勢と遠くの敵の軍勢とが殆ど同じ大きさで描かれており、その中間あたりに棚引く雲のようなものを描くことで両者の間の距離感が出されている。描いている絵師は、遠近法の場合のように自らの視座を一定の所に固定するのではなく、近くのものであれ、遠くのものであれ、自分がいま描こうとするものの傍らに身を寄せ、対象と対立するよりはそれと融合するという＜主客合一＞の構図で描いているということである。(日本の絵画における遠近法的手法は基本的には近代以後の西欧絵画の影響によるものと考えられている。) 言語による表象と絵画による表象——こういう二つの異なる分野における文化的な営みに、同じ傾向が平行して認められることは興味深い。多分、このことはその傾向がその文化の中に深く根ざした性格のものであることを示唆しているということであろう。

参考文献：

池上嘉彦 2000『「日本語論」への招待』(特に、第三部「日本語の主観性と主語の省略」, pp. 237－31)講談社.

——— 2004, 2005「日本語の＜主観性＞と＜主観性＞の指標 (1)－(2)」『認知言語学論考』3:1－54,『認知言語学論考』4:1－60.

———ほか2006「特集:＜いま＞と＜ここ＞の言語学——ことばの＜主観性＞をめぐって」『言語』2006年5月号, pp. 20－81.

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com